

## 三島市郷土資料館蔵「勝俣文庫」こぼれ話—書籍は語る—

芳賀 多美子 (森澤 多美子) \*

### Anecdotes from the 'Katsumata Collection'

### Held by Mishima City Local History Museum: What Books Tell Us

HAGA Tamiko (MORISAWA Tamiko)

Key Words: Edo Meiji Haikai Haiku Mishima City

#### 1. 勝俣文庫について

三島市郷土資料館に蔵されている「勝俣文庫」は、俳人連水家の蔵書をご子孫が三島市に寄贈されたものである。連水は、天保3(1832)年6月16日生、明治31(1898)年10月4日没。伊豆国佐野村(現三島市)の名主勝俣常久(通称猶右衛門)である。明治期の駿東地区の俳壇指導者「俳関瀧の本連水」(俳諧の関守である俳人の意味)として、全国に名を知られた存在であった[注1]。この文庫は、『勝俣文庫目録』(昭和52年3月 三島市郷土館)によって整理され、975点を掲載している。その後、勝又基「文庫はいかにして形成されるか—三島市郷土資料館蔵勝俣文庫の蔵書目録三点」(人間文化研究機構国文学研究資料館研究調査報告第36号 2016.3.31)は、勝俣家に保管されていた覚書きを「目録」として位置づけた上で、「勝俣文庫」形成の様相を報告している。

本稿では、それら4点の目録を紐解きながら、「勝俣文庫」の書籍に記録された情報を整理してささやかな報告を行うものである。

#### 2. 文庫目録

まずは、勝又稿に寄りかかりながら、勝俣家三点の目録を確認しておく[注2]。

##### ①嘉永七年(1854)目録

巻末識語「嘉永七寅年/閏七月吉日改之/豆陽伊豆佐野村/滝の入/勝俣花岳山人」とあることから、勝俣花岳の手になる覚書である。勝俣花岳は、勝俣直衛門常昭。花岳のほか、和水・春湖齋・函麗齋・函林麓齋などと号す。文化元(1804)年生、安政6(1859)年4月15日、56歳没。

花岳の「嘉永七年目録」に最終的に記録された書は323点。勝又稿が指摘するように加筆は多様なジャンルに及ぶが、例えば俳書59点(全体の18%)に関し、別筆による加筆部分

は21点と推定される。21点中16点には購入の日付(安政6年~慶応3年)と金額が添えられている。加筆部分はほとんどが連水による購入の記録であり、当時の書籍の価値を示す資料となろう。一方、花岳が記載したと思しき部分には、金銭の記録はない。嘉永7年時点での花岳の記録は、自分の蔵書を整理して書き留め、何があるのか何がないのかを把握する目的と考えられる。「目録」作成意識の本来のあり方である。その後、「勝俣文庫」の蔵書は、連水の書籍購入によって増えていき、息子清作も「購入記録」=「明治三年萬覚書(明治三年目録)」として記録していくこととなる。

連水から清作への移行期は、二つの目録に重複して記載されるものもある。

例えば、「嘉永七年目録」の

142 岩見武勇伝

前編二十五冊 後編二十五冊

代金貳両也

明治参午年正月廿一日求

143 宮本佐々木武勇伝

前編二十冊 後編二十冊 代金壹両也

明治二巳年四月廿八日求

は、「明治三年目録」では

54 宮本佐々木武勇伝

四十冊 明治二巳巳年四月十八日

代金壹両也

55 岩見武勇伝

五十冊 明治参庚午年正月廿日 代金三両也

と記され、多少の異同があるものもあるが、

144 増補先代萩

二拾四冊 代金貳分也

明治四辛未年十二月十五日

三しま市ヶ原堤屋にて求(「嘉永七年目録」)

90 増補先代萩

廿四冊 明治四年師走十五日

三島市ヶ原堤屋にて求

代金式分也(「明治三年目録」)

などのように、どちらにも同じ記載をしているものもあった。

## ②明治三年(1870)目録

表紙「明治三庚午年/萬覚書/豆州佐野村/勝俣清作」。清作は、連水の長男であり、安政2(1855)年生、明治8(1875)年1月29日、21歳没。夭折した清作の個人蔵書目録は、「萬覚書」とあるように書籍購入記録である。①とは基本的には重ならないが、①にも加筆したことにより重複する部分が一部存在する。いつどこでいくら購入したかという克明な記録により、沼津三島の幕末から明治にかけての本屋との取引状況が明らかである。日付、本屋、値段の記録から「三島/市ヶ原町/塚屋」「三島/市ヶ原町/堤屋」「三島/久保町/木屋」での購入記録が圧倒的に多いことがわかる。それに比べると数は少ないが、「沼津/本源」「沼津/本浦」からの購入もある。

「明治三年目録」に記された、「沼津/本浦」や「沼津/常盤屋」は、現蔵書の印「駿州/沼津/常盤屋浦吉」「本浦」(『豊臣鎮西軍記』)や「沼津上土町/常盤屋浦吉」「本浦」(『遠州執着譚』)から沼津上土町にあった「常盤屋=本浦」と推察できる。本目録の記録は、明治12年まで続くが、明治7年の年末ころから今までなかった俳書の購入が目につく。

## 210 風俗文選註解 四冊

同年同月同日同所にて求

(明治7年11月16日沼津)

## 212 俳諧古今抄 五冊

同年同月同日同所にて

(明治7年11月16日沼津)

## 217 増補七部集 二冊

同(明治7年12月14日三島市ヶ原塚屋)

## 219 俳諧仮名遣 壹冊

同(明治7年12月14日三島市ヶ原塚屋)

年が明けた明治8(1875)年1月29日に清作は亡くなっている。その後の購入で

## 224 俳諧袖珍鈔 十三冊

同(明治8年2月)二十五日

ヌマツ擁萬堂にて求

是は本ヶ原香雲堂にて合本二冊になし候

とあるのは、連水の筆になるものだろう。とすれば、前年末の俳書購入も連水であった可能性がある。

さらに、「嘉永七年目録」に記載された俳書は慶応3年まで記録され、「明治三年目録」に俳書が記載されるのは、明治7年末からである。この間、俳書の流入がなかったとは考えにくい。明治初期は一連の『俳家新聞』系俳書に連水の入集が見られ、「俳関」連水のもとに全国から俳人が訪れ始めている時期である[注3]。想像を逞しくすれば、連水による「覚書(蔵

書目録)」も別にあつたのかもしれない。

## ③昭和二十二年(1947)目録

表紙「昭和廿二年拾壹月/古和本/蔵書目録/勝俣家」巻頭「昭和二十二年十一月調べ」子孫である故勝俣巖氏が文庫の整理のために作成。その性格上、①②の一部分を含み、なおかつ①②に記載されていない蔵書もある。(①②はそれぞれ半数以上散逸している)。

これら3点、どの目録も「勝俣文庫」形成にとって重要な意味を持つが、勝俣花岳の書籍収集から「勝俣文庫」は始まっている。そこで、①の目録を手がかりに「勝俣文庫」の始まりをあらためて考えてみたい。

## 3. 俳人花岳(和水)の蔵書

では、花岳はいかにして書籍を入手したのか。

ここで、花岳の蔵書収集活動について「勝俣文庫」現蔵書から整理しておく[注4]。

現在確認できる一番早いものは、

文化9(1812)花岳9歳

『雪明常盤松』(刊 文庫968 嘉永214)

四月吉日求之/勝俣政治郎

となる。刊本を9歳の少年花岳が手に入れたわけである。時を経て、20代になると筆写により本を獲得していく。

文政9(1826)花岳23歳

『加州家土敵討』(写 文庫1165)

正月吉日写之/函林鹿齋和水

文政10(1827)花岳24歳

『俳諧手桃灯』(写 文庫510 嘉永45)

三月吉日写之/勝俣函麓齋和水

『俳句集』(写 文庫1159)

三月吉日写之/勝俣函麗齋和水・春湖齋

文政11(1828)花岳25歳

『鳶眼集』(写 文庫1164)

二月吉日写之/勝俣函麗齋和水

文政12(1829)花岳26歳

『紙つひえ』(写 文庫1168)

五月吉日写之/勝俣春湖齋和水

『真書太閤記 初篇』(写 文庫23 嘉永8)は、文政12年から天保13(1842)年にかけて書写し続けられたことが署名によってわかるものである。

天保3(1832)花岳29歳は、連水の誕生した年である。

『伊達競 豆腐屋の段』(刊 文庫473)

勝俣嘉平・春湖齋和水山人

『若葉帖』(写 文庫1148 嘉永40)

水無月良日写之/春湖齋和水山人

天保8(1837)花岳34歳には

『俳諧をだまき綱目大成』(刊 文庫 579 嘉永 23)

弥生吉良日求之/勝俣春湖齋常昭

俳書刊本を手に入れた記録である。連水 6 歳であり、このあと連水は 12 歳ころには俳諧を嗜むようになっている。蔵書環境によって、俳人連水の下地は作られていく。

以降、花岳 40 代になっても衰えることなく、筆写は続けられていく。

弘化 5(1848)花岳 45 歳

『常磐津集本』(写 文庫 894 嘉永 174)

三月吉祥日写之/勝俣政治郎

嘉永元(1848)花岳 45 歳

『赤穂精義内侍所』(写 文庫 228 嘉永 84)

八月吉日写終/勝俣政治郎

『賊禁秘談』(写 文庫 39 嘉永 86)

十月十四日写終/勝俣政治郎

『仮名手本忠臣蔵』(刊 文庫 565 嘉永 145)

十二月吉良日求之/春湖齋常てる

嘉永 2(1849)花岳 46 歳

『八百屋お七実録』(写 文庫 639 嘉永 98)

閏四月吉日写之終/勝俣政治郎

『肝要工夫録』(写 文庫 621 嘉永 97)

七月吉日写之/勝俣政治郎

嘉永 3(1850)花岳 47 歳

『厭蝕太平楽記』(写 文庫 73 嘉永 9)

菊月吉良日写之終/勝俣政治郎

嘉永 4(1851)花岳 48 歳、

連水 20 歳である。この前年に連水は結婚している。

『俳諧初心抄』(写 文庫 1158 嘉永 33)には、以下の識語があり、花岳が三島永明寺の天然に師事し、俳諧を学んだことが知られる。

此本三嶋赤橋永明寺の玄妙庵天然老は予が師にて  
或日老師宅より戻りける時此本を拝借して写し置

ぬ/勝俣花岳/嘉永四辛亥年/菊月吉日

嘉永 5(1852)花岳 49 歳

『遠江守玄蕃守御両吟歌仙』(写 文庫 869)

菊月吉良日写之/勝俣花岳

嘉永 6(1853)花岳 50 歳、

人生の節目を迎えて、伊勢講の一向に加わるか。

『道中之日記(自筆)』[注 5]は「嘉永六丑年(1853)睦月初の七日 豆陽伊豆佐野村滝の入勝俣花岳山人」の識語があり、伊勢参りの一行総勢 45 人ほどの記録(旅日記)である。正月 7 日に旅立ち、2 月 26 日に帰着。伊勢から奈良・大坂を経て姫路から海を渡り琴平へ参り、帰路は京都経由。興味深いのは、各地神社仏閣の参拝の折、

(1 月 27 日)

郡山城下にはせをの時雨塔あり つい参詣致さず  
同行の日記を借用いたし写し置り

けふ斗り人も年寄れ初しくれ

(2 月 4 日)

西の宮太神え参詣致す はせをの石碑あり

春もやゝけしきとゝのふ月と梅 はせを

によつぼりと秋の空なるふじの山 おにつら

(2 月 6 日)

明石の人丸の社え参詣…門前にはせをの石碑あり

蛸壺やはかなき夢を夏の月

梅宝の書にて魯十造立

(2 月 18 日)

大津石山寺え参詣いたす…

翁の御壺え参詣致す

など、ついでながらも、芭蕉関係碑への執着が垣間見えることである。基本的には、現実的な記述が多いものの、日記中には何句かの花岳自詠句もあり、俳人花岳の旅日記の側面もある。

安政 3(1856)53 歳には

『嶋津琉球軍精記』(写 文庫 328 嘉永 16)

6 冊目に「霜月吉良日/瀧の入勝俣氏」と書かれており、「嘉永七年目録」から「安政三年十二月吉日求」とわかる。花岳筆写ではなく、写本を求めたということだろう。署名からは特定できないが、年代的に見て花岳最後の収集本かもしれない。

その他、

『古人五百題発句集』(刊 文庫 1102 嘉永 41)

函麗齋和水

『曠野集』(刊 文庫 463)

勝俣春湖齋常昭山人

『続猿蓑集』(刊 文庫 889)

春湖齋常昭閑人

『俳諧七部集』(刊 文庫 426 嘉永 21)

春湖齋常昭山人

『三浦大助紅梅鞞』(刊 文庫 504 嘉永 154)

勝俣春湖齋和水山人/勝俣嘉平

『忠臣蔵(浄瑠璃本集)』(刊 文庫 681)

春湖齋常昭閑人

『伊勢平氏年々鑑』(刊 文庫 472 嘉永 161)

春湖齋和水/勝俣嘉平

『雲妙間雨夜月』(刊 文庫 225 嘉永 182)

勝俣嘉平常昭

『恋娘昔八丈』(刊 文庫 724 嘉永 151)

春湖齋和水山人/勝俣嘉平

『道中膝栗毛』(刊 文庫 376 嘉永 180)

印「春湖齋/常昭」など、年月日の記載はないが、刊本の収集活動は続く。それでも、一般的に写本は多い。ここから、花岳の精力的な筆写による書籍収集の姿が浮かび上がる。多種多様なジャンルではあるが、やはり俳書が一定数含まれており、俳人花岳の収集であることは明らかである。

#### 4. 花岳から連水へ

花岳の俳諧活動については今後の調査が必要である。現状、俳書への入集は管見の範囲では確認できていない。当時の三嶋俳壇を代表するのは浮月齋湖静であるという[注6]。浮月齋湖静は、大須賀鬼卯『東海道人物志』(享和3)にも「三嶋駅医 家相 算学 穩道 字子貞 号浮月 横山玄与」と紹介されている人物。

実際、湖静の俳諧活動は文化文政時代を中心とする。例えば、嵐窓『餘綾集』(文化11)・午心追善集『錦袋集』(文化14)・雪中庵對山『旦暮帖』(文化15)・嵐窓『蛩雪集』(文政1)・嵐窓『相模風流』(文政3)・『樸佛集』(文政6)などへの入集を確認できる[注7]。

ただ、同じ地域同じ時代に生きた人の交流がなかったとは言えない。和水と湖静がどこかで繋がることはなかったのだろうか。奇しくも「勝俣文庫」には浮月齋湖静の蔵書印または識語がある書籍10点を確認できる。

『十論為弁抄』(文庫416)・『増増井』(文庫487)・『はせを翁十六篇』(文庫705)・『嵐雪文集』(文庫786)・『俳諧壺鏡抄』(文庫809)・『嵐雪発句集』(文庫838)・『芭蕉発句評林』(文庫853)・『報恩集』(文庫916)・『俳諧髭箒』(文庫1173)

いずれも俳書であり、これらは「嘉永七年目録」「明治三年目録」に記載されていない。この中で『芭蕉発句評林』(文庫853)には、「浮月齋/湖静」の印の他に「瀧廼本」の印がある。文庫の現蔵書の中に「瀧廼本」印のあるものはわずかに4点のみ。『風俗文選』(文庫136)には「瀧廼本」と「妙玄心院」。『俳諧芭蕉談』(文庫363)・『幽蘭集』(文庫134)には「俳閑・勝俣蔵書・瀧廼本・連林堂/連水・瀧之本次」と「煙霞泉/石山房」。『文苑玉露』(文庫551)には「連柿堂・連水・瀧之本瀧廼本」と「増庵」。これら共通して①②の目録に記載がないこと、「瀧廼本」印から俳関連水の蔵書であることから、俳人としての地位を確立しつつある連水が旧蔵者から寄贈されたものの可能性もある。地域の実力俳人の旧蔵書が、別の有力俳人の蔵書となったか。和水と同時代を生きた俳人湖静の蔵書が、連水家の蔵書として伝わっていることは興味深い。現存する文庫の調査から、本にまつわる人々の生き様が垣間見えるようである。

#### 5. 終わりに

長い時を経て保存されてきた書籍は、時に雄弁に時代を話してくれる。これまで、連水の父という評価でしかなかった花岳を改めて花岳の書籍から探って描いてみた。「勝俣文庫」の始まりは、勝俣花岳の飽くなき好奇心・知識欲の成果であり、この土壌こそが、紛れもなく俳人瀧の本連水を育んだ環境であった。

[注1]俳人連水については、以下に詳しい。

- ・長谷川福太郎『岳南の俳諧人伊豆佐野の人 瀧のもと連水』(昭和52年3月 三島郷土館)
- ・森澤多美子「素描・瀧の本連水—芭蕉を愛した明治俳人」(『江戸文学の冒険』平成19年3月 翰林書房)
- ・勝又基「文庫はいかにして形成されるか—三島市郷土資料館蔵勝俣文庫の蔵書目録三点(人間文化研究機構国文学研究資料館調査報告台36号 2016.3.31)

[注2]本文中の目録名は勝又稿に従い、「嘉永七年目録」「明治三年目録」「昭和二十二年目録」と統一する。

[注3]前掲森澤稿参照。

[注4]【参考年表】参照。現存する書籍を、勝俣常昭・花岳・和水・春湖齋などの署名・識語・蔵書印などから整理。表記中の「文庫」は「勝俣文庫目録」を示し、「嘉永」は「嘉永七年目録」を示す。

[注5]『道中之日記』(平成11年3月1日 三島市教育委員会)による。

[注6]「六花庵三代」(贅川他石 昭和9年)による。

[注7]『蛩雪集』には「イズ 和叟」なる人物の入集が確認できるが、「和水(花岳)」と同一人物かは不明。

参考年表		(注) 「文庫」は勝俣文庫整理目録、「嘉永」は「嘉永七年目録」を示し、勝又稿の整理番号で示した。						
西暦	元号	年	花岳(年齢)	花岳(和水)活動	文庫	嘉永	連水(年齢)	連水活動
1804	文化	1	1	誕生				
1812		9	9	『雪明常盤松』(刊) 四月吉日求之/勝俣政治郎	963	214		
1826	文政	9	23	『加州家士敵討』(写) 正月吉日写之/函林鹿齋和水	1165			
1827		10	24	『俳諧手桃灯』(写) 三月吉日写之/勝俣函麓齋和水 『俳句集』(写) 三月吉日写之/勝俣函麓齋和水・春湖齋	510 1159	45		
1828		11	25	『鳶眼集』(写) 二月吉日写之/勝俣函麓齋和水	1164			
1829		12	26	『紙つひえ』(写) 五月吉日写之/勝俣春湖齋和水 『真書太閤記 初篇』(写) * 文政12年から天保13(1842)年にかけて書写	1168 23	8		
1832	天保	3	29	『伊達鏡 豆腐屋の段』(刊) 勝俣嘉平・春湖齋和水山人 『若葉帖』(写) 水無月良日写之/春湖齋和水山人	473 1148	40		1 誕生
1837		8	34	『俳諧をだまき綱目大成』(刊) 弥生吉日求之/勝俣春湖齋常昭	579	23		6
1843		14	40					12 俳諧入門(卓郎に入門か) 瀧亭晋水と号すか
1848	弘化5 嘉永	1	45	『常磐津集本』(写) 三月吉祥日写之/勝俣政治郎 『赤穂精義内侍所』(写) 八月吉日写終/勝俣政治郎 『賊禁秘誠談』(写) 十月十四日写終/勝俣政治郎 『仮名手本忠臣蔵』(刊) 十二月吉日求之/春湖齋常てる	894 228 39 565	174 84 86 145		17 【年次不明】 『臙夜集』 (刊 文庫1034) 印「瀧亭」 『俳諧百家類題集』 (刊 文庫1001) 印「晋水」 墨書「豆陽佐野村/瀧亭」
1849		2	46	『八百屋お七実録』(写) 閏四月吉日写之終/勝俣政治郎 『肝要工夫録』(写) 七月吉日写之/勝俣政治郎	639 621	98 97		18 印「晋水」 墨書「豆陽佐野村/瀧亭」
1850		3	47	『厭蝕太平楽記』(写) 菊月吉日写之終/勝俣政治郎	73	9		19 結婚
1851		4	48	『俳諧初心抄』(写) 此本三嶋赤橋永明寺の玄妙庵天然老は予が師にて或日老師宅より戻りける時此本を拝借して写し置ぬ/ 勝俣花岳/嘉永四辛亥年/菊月吉日	1158	33		20
1852		5	49	『遠江守玄蕃守御両吟歌仙』(写) 菊月吉日写之/勝俣花岳	869			21
1853		6	50	『道中之日記』(自筆) 睦月初の七日/豆陽伊豆佐野村滝の入/ 勝俣花岳山人 * 伊勢参りの一行総勢45人ほど。正月7日に旅立ち、2月26日に帰着。				22
1854	嘉永7 安政	1	51	『嘉永目録』作成か				23
1855		2	52					24 長男清作誕生
1856		3	53	『嶋津琉球軍精記』(写) 霜月吉日(6冊目)/瀧の入勝俣氏 安政三年十二月吉日求(嘉永目録)	328	16		25
1857		4	54					26
1858		5	55					27 家督を継ぐ
1859		6	56	四月十五日没				28 種玉庵連山に入門か 晋水から連水と改めるか

		文庫	嘉永
【年次不明】	『古人五百題発句集』（刊）函麗齋和水	1102	41
	『曠野集』（刊）勝俣春湖齋常昭山人	463	
	『続猿蓑集』（刊）春湖齋常昭閑人	889	
	『俳諧七部集』（刊）春湖齋常昭山人	426	21
	『三浦大助紅梅鞠』（刊）勝俣春湖齋和水山人/勝俣嘉平	504	154
	『忠臣蔵（浄瑠璃本集）』（刊）春湖齋常昭閑人	681	
	『伊勢平氏年々鑑』（刊）春湖齋和水/勝俣嘉平	472	161
	『雲妙間雨夜月』（刊）勝俣嘉平常昭	225	182
	『恋娘昔は文通本』（刊）春湖齋和水山人/勝俣嘉平	724	151
	『道中膝栗毛』（刊）印「春湖齋/常昭」	376	180